

図書館通信

最上校図書委員会 No.20 11月22日



「読書の秋」 ぜひ、新刊を読んでみよう！



『プリテンド・ファーザー』 白岩玄著

恭平と章吾。正反対の同級生。唯一の共通点は、1人で子どもを育てていること。「ケア」と「キャリア」のはざままで引き裂かれるすべての人に贈る、新しい時代のための拡張家族の物語！

『変な絵』 雨穴著

9枚の奇妙な絵に秘められた衝撃の真実とは!?

その謎が解けたとき、すべての事件が一つに繋がる！

『葉と嘘の季節』 米澤穂信著

ある放課後、図書室の返却本の中に押し花の葉が挟まれているのに気づく。小さくかわいらしいその花は猛毒のトリカブトだった。誰が教師を殺そうとしたのか。次は誰が狙われるのか？

『あかずきん、ピノキオ拾って死体と出会う。』 青柳碧人著

世界のみんが知っている童話をベースにした連作本格ミステリ。

『憐憫』 島本理生著

かつて子役だった沙良は、芸能界で伸び悩んでいた。自分の正体をまったく知らない人間に出会いたい。そんな折に酒場で偶然出会った柏木という男に、たまらない愛しさと憐憫を感じた。

愛に似て、愛とは呼べない関係を描く。

『天地の旅人』 沢木耕太郎著

第二次大戦末期、敵国の中国大陸の奥深くまで「密偵」として潜入した若者・西川一三。敗戦後もウマ僧に扮したまま、幾度も死線をさまよいながらも、未知なる世界への歩みを止められなかった。その果てしない旅と人生を描き出す。



2022 第三回 映画鑑賞会 in 最上校

「護られなかった者たちへ」

図書委員会企画 第三回映画鑑賞会を11月17日(木) 3時50分からPC室で開催しました。1年6人・2年5人・3年9人の合計20人と過去5年間で一番の大盛況でした。今後も、皆様のご参加をお待ちしております。

作品は東北大震災から始まり、仙台市の福祉保険事務所での生活保護受給についての国の政策の在り方の問題や、人それぞれが、護ってあげられなかった者たちへの想いが詰まった作品で、錯綜シーンが多く、戸惑ったのではないのでしょうか。

- ・東日本大震災の事が思い出され、その時の悲しみ、苦労、貧困、様々な事がまだまだ、解決していない事があるのだろうなと思った。その中でも、見つからない人がいるので、一日も早く帰ってきてほしいと思う。
- ・人は誰しもが、悩みや、秘密を抱えて、毎日を精一杯生きているということがわかった。私もこれからの人生、後悔のないように生きていこうと思う。
- ・「声を上げる」ことで、誰かが手を差し伸べてくれる。声を出さなければ何も始まらない。自分も声を上げ、人の声に耳を傾けていきたいと思います。
- ・生活保護という制度があることを知った。
- ・何時、何が起こるかかわからないので常日頃の備えが必要だと思った。



2022年発表 オススメ新刊図書



『小さいわたし』 益田ミリ著

子ども時代を、子ども目線でえがく。幼い頃、胸に抱いた繊細な気持ちを、丁寧に、みずみずしくつづります。四季を感じるエピソードも収録。かけがえのない一瞬を切り取った、宝物のような春夏秋冬。



『私と街たち (ほぼ自伝)』 吉本ばなな著

街に自分だけの歴史が積み重なり、深い色になっていく。子どもの頃に遊んだ街、青春を過ごした街、父の死を見送った道。東京の「街」をめぐる自伝的エッセイ集。



『寝ても覚めてもアザラシ救助隊』 岡崎雅子著

アザラシ保護施設で働く飼育員の奮闘保護エッセイ！アザラシ愛溢れる飼育員が、アザラシの魅力と10年にわたる保護活動を通じて見えてきたアザラシの抱える問題について伝えます。愛くるしい表情と仕草で私たちが癒してくれるアザラシたちをもっと知ろう！



『パリの空の下で、息子とぼくの3000日』 辻仁成著

ぼくは父であり、母であった。シングルファザーになったあの日から。本書は14歳の頃からスタートするが、回想するように、息子が10歳だった当時に遡ることもある。小学生が大学生になるまでの間の父子の心の旅の記録である。



『そして誰もいなくなった』 朝井リョウ著

頭からっぽで楽しめる本！一生懸命生きていたら生まれてしまったエピソード全20編を収録。楽しいだけの読書をしたいたあなたに贈る。

『その本は』 又吉直樹・ヨシタケシンスケ著

本の好きな王様がいました。王様はもう年寄りで、目がほとんど見えません。王様は二人の男を呼び、言いました。世界中をまわって「めずらしい本」について知っている者を探し出し、その者から、その本についての話を聞いてくれ。そしてその本の話をしてほしいのだ。旅に出た二人の男は、たくさんの本を持ち帰り、王様のために夜ごと語り出した。



『腹を割ったら血が出るだけさ』 住野よる著

愛されたいに囚われた女子高生、ありのままを誇る美しい青年自らのストーリーを作り続けるアイドル、他者の失敗を探し求める少年。それぞれの踏み出す一歩が交差して響き合う、青春群像劇。

『あさとほ』 新名智著

夏日は、研究室の教授が失踪したとの報せを受ける。先生は、平安時代に存在したがその後失われてしまった「あさとほ」という物語を調べていたらしい。先生の行方と未詳の物語「あさとほ」を追う夏日は、十数年ぶりに明人と再会し、共に調査を始める。二人が行方不明の物語の正体に辿り着くとき、現実が大きくその姿を変える。

『財布は踊る』 原田ひ香著

みづほはある夢を実現するために、生活費を切り詰め、人知れず毎月二万円を貯金していた。二年以上の努力が実り、夢を実現した喜びも束の間、夫に二百万円以上の借金があることが発覚。様々な事情で今より少し、お金がほしい人達の、切実な想いと未来への希望を描く！

『レペゼン母』 宇野碧著

女手一つで育て上げた一人息子の雄大は、二度の離婚に借金まみれ。そんな時、偶然にも雄大がラップバトルの大会に出場することを知った明子。「きっとこれが、人生最後のチャンスだ」明子はマイクを握り立ち上がる！

『祈りのカルテ 再会のセラピー』 知念実希人著

諏訪野の脳裏に蘇るのは、親身に寄り添ってきた患者たちのこと。まるで戦場のような救急部、心の傷と向き合う形成外科、かけがえないある人との出会いと別れを経験した緩和ケア科。切なくもあたたかな記憶の扉がいま開く。感涙必至、心震える医療ミステリ。

『殺人者の白い檻』 長岡弘樹著

父母を殺した死刑囚、あなたならその命、救えますか？憎き犯罪者と医師は、どう向き合えば良いのか？犯罪者の生命は軽いのか、あるいは全ての人間と等しく重いものなのか？事件の真実と真相はどこにあるのか？究極の医療ミステリ。



※ぜひ、図書館へ